

コメディリリック第1回「へ夕に経た」

「鬼だらけ」

登場人物

高木 ペイリー・チャイルド

吉野 テオ・ポ―

白石 シロスコフ

齋藤 野彦

※全員、板付き

【し・明転】

※吉野、齋藤、登場

合コン中の4人

吉野 「じゃじゃん！『しめる事はできてあ

けることはできないものはなーんだ？』」

高木 「えー…みんな、なんだと思うー？」

齋藤 「はい！はいはい！ネクタイ！」

吉野 「正解！」

齋藤 「よっしゃ！やった！」

吉野 「続きまして…じゃじゃん『綺麗になればなるほど黒くなるもの、なーんだ？』」

高木 「えー…普通、逆だよな？汚れたら黒くなるもんね？何だと思うー？」

齋藤 「はい！はい！はい！黒板！」

吉野 「正解！」

齋藤 「やったあ！やったあああ！」

吉野 「続きまして…あ、どうしたの？」

高木 「みんなでトイレ？うんいいいよ！いいよ！」

吉野 「もう次の問題用意しちゃってるから早く帰ってきてね」

女の子たちを見送る

高木 「…あのさ、何を馬鹿みたいになぞなぞ出し続けてんの？」

吉野 「え」

高木 「何で女の子との飲み会でみんなでなぞなぞ考えなきゃいけないんだよ」

吉野 「ダメ？」

高木 「ダメだよ！盛り上がるわけじゃないじゃん！」

吉野 「笑ってなかった？」

高木 「苦笑いだから、んでお前はすぐに正解出してんじゃねえよ！」

齋藤 「え？」

高木 「せめてそこは女の子に答えさせろよ！」

齋藤 「正解したらモテるかなと思って」

高木 「お前のはいはいがうるせーから舌打ち

されてたよ」

齋藤 「マジかよ」

高木 「白石は全然しゃべんないし…ポンコツ

かよ全員」

白石 「ダメだ…俺、女の子の前にとどう

してもこうなってしまうて…」

高木 「ただでさえでけーのに、ずっと黙り込

んでたら超怖いから」

白石 「ごめん…ああ…でもどうしても、どう

しても仲良くなりたない」

高木 「いやー厳しいだろーもう今日は無理で

しょ」

白石 「諦めたくない」

高木 「諦めたくないって」

白石 「お前は彼女いるからいいかもしれない

けど！俺は…俺は…いないんよお？」

高木 「じゃあ、もつと頑張れよ！そうだよ、

何で彼女がいる俺がこんな孤軍奮闘しな

きやいけないわけ？」

白石 「彼女とかじゃなくていい、もうほんと

気に入られるだけでいいんだ…どうにか

なんないかな？」

高木 「あの話知ってる？ 『泣いた赤鬼』って

話」

3人 「『泣いた赤鬼』？」

【し・暗転】

モニター

絵本を投影

高木 「ある山の中に赤鬼が住んでいた。心優

しい赤鬼は村の人間たちと仲良くなりた

いと思っていたが、その恐ろしい姿のため

誰も友達になつてくれなかった。ある日

赤鬼は友達と青鬼と再会し、このことを

話す。すると青鬼は「オレがわざと村で

暴れ回るから、キミはオレをやっつける

フリをしてくれ。そうすればキミは人間

たちのヒーローになれるぞ」と提案す

る。それじゃあいくらなんでも青鬼に悪

いと断ろうとする赤鬼だったが、青鬼は

強引に赤鬼を引き連れ村へと向かう。青

鬼を赤鬼がやつつけ（るフリをし）てか

ら数か月がたった。赤鬼は今では村の人

気者。あれほど自分を恐れていた子供達

も、みな赤鬼のことが大好きになっていった。しかし赤鬼は、青鬼を見かけないことを心配していた。気になった赤鬼は自宅に戻るが、そこに青鬼の残した張り紙を見つける。張り紙には、「オレとつるんでるのがバレたら、赤鬼くんまで悪い鬼だと思われるしまう。オレはもうこの村には立ち寄らないことにした。だが、オレはいつまでも赤鬼君の友達だ」と書いてあった。赤鬼は、張り紙を何度も読み返し、涙を流すのだった」

【し・明転】

吉野 「それがどうしたの？」

高木 「つまり今から俺が白石にとっての青鬼になるから」

白石 「俺にとつての青鬼？」

高木 「いいか？今から俺がわざと女子たちに嫌われるようなことを言う。そこでお前が一言フオローをする。そしたら女子たちみんなお前のことが好きになる」

吉野 「はーなるほど」

白石 「そんな、いいの？」

高木

「しようがないだろ。もうこれしかないんだから。実際ちゃんとフオローできるかどうかはお前自身にかかってんだから、頑張れよ」

白石

「わかった」

女子たちが戻ってくる

吉野

「あ、おかえり！」

高木

「おかえり！てかさ、思ったんだけど、春ちゃんって、めっちゃおっぱい大きいよね！何かツプあんの？…え、いいじゃん。教えてよ。てか、みんな教えてよ。ほらそっちから順番におっぱい何カツプか言ってこ？ほらほら」

白石

「…ちよ…ちよ…高木！…そんなこと聞くのやめろよ。失礼だろ」

高木

「悪い」

白石

「…え？そんな優しくないよ。当たり前のことを言っただけで」

高木

「つまらないやつだよねー」

白石

「いやいや、ほんとそんな褒められても何も出ないから。え、趣味？映画かな？」

ニコニコする高木

齋藤

「あのさ、おっぱいって何かカップあるの？」

高木

「え？」

齋藤

「高木が指摘したらどうしても気になつてきちゃって：ねえ何かカップ？教えてくれないかな？何かカップか頼むから教えてくれないかな？」

高木

「おい、齋藤！おい！」

吉野

「あ、トイレ？」

高木

「おけおけ！注文とか大丈夫？うんわかつた」

女子たちを見送る

高木

「お前、何やってんの！？」

齋藤

「本当に気になつちやって」

高木

「馬鹿じゃないの？」

吉野

「でもすげー！白石、本当に好かれてたよ！好感度がグワーって」

高木

「だろ？」

白石

「生まれて初めて女子から趣味を聞かれた」

高木

「よかったじゃん。うまく繋げろよ」

吉野

「白石だけずるいわー俺にもやってくんない？」

高木

「また青鬼すんのー？」

吉野

「頼みますよ青鬼さんー。私、黄鬼にもお願いしますよー」

高木

「しようがないなー」

女子たちが帰ってくる

吉野

「あ、おかえりー」

高木

「あのさ、ちよつと真面目な話していい？今までの経験人数教えてくれない？いや、これすごい大事だから。桜ちゃん何人？何人とエッチしたの？いや、ほんとここだけの話にするから。ほらこれも順番に聞くからまずは桜ちゃんはどうぞ！」

吉野

「高木！いい加減にしようぜ」

高木

「吉野」

吉野

「過去のことなんかどうでもいいだろ？大切なのはこれからの話だろ？これからの経験人数を俺一人にするか：そういうことだろ？」

高木

「お、おお」

高木

「：いや、こう見えて硬派などこあつてさ。うん。え、素敵？マジでありがとらう！ギャップ？嬉しいなあ」

吉野

「お、おお」

高木

「お、おお」

吉野

「お、おお」

高木

「お、おお」

吉野

「お、おお」

高木 「古臭い男だけどね」

白石 「でもいいよね。吉野のそういう考え誠実だね」

齋藤 「え、気にならない？」

高木 「は？」

齋藤 「気になるよね？俺は経験人数すごく知りたいよ！それ次第でこつちも態度変わってくるし」

高木 「齋藤？ねえ？齋藤違うじゃん？」

齋藤 「教えてくれない？桜ちゃん？何人なの？初めては何歳の時？どんな人？付き合ってた人？初めて会った人？」

高木 「齋藤！齋藤君！？」

吉野 「…あ、トイレ？」

高木 「だよねートイレだよねー。全然大丈夫！こつちのことは任せて！」

女子を見送る

高木 「馬鹿鬼！おい！」

白石 「ちよつと気持ち悪いよ？」

齋藤 「だって気になるでしょ？経験人数ーそれによって態度変わるじゃんー」

高木 「馬鹿野郎！お前ら何か経験人数によって態度を変えられる次元にいないんだよ！馬鹿鬼。ブス鬼」

吉野 「でも俺の好感度は爆上がりだったわー青鬼さんありがとう」

高木 「このブス鬼さえいなきやもつとうまくいってんだけどなー」

齋藤 「じゃあ、次は…」

高木 「無理無理。お前はもう無理だよ」

齋藤 「頼むよー。青鬼さんー」

高木 「ブス鬼君は無理です」

齋藤 「なんで！？ずるいよ！二人だけ！平等にしてよ！」

高木 「めちやくちや怒るじゃん」

白石 「でもここまで来たらこつちから挽回させる青鬼さんが見たいよ」

吉野 「確かに青鬼さんの奇跡みたい」

高木 「いやー敵しいでしょー」

齋藤 「頼むよーそこをなんとか。お願いします！」

高木 「あーわかったよ。やるだけやるから」

齋藤 「よっしゃあ」

[SEE LINE]

---

高木

「あ、LINE来た。お、春ちゃんから  
二次会カラオケ行こうって」

白石

「え、マジ？」

吉野

「やった」

高木

「齋藤抜きで」

齋藤

「え」

吉野

「そりゃそうだよ」

白石

「自業自得」

齋藤

「（泣く）」

高木

「泣いたブス鬼」

【し・暗転】